

院外茶話

vol.135 平成 28 年 8 月 1 日

一生のうち何回か
大きな決断に迫られる
その成果は
だいぶん後でわかるもの

一生一度の 建築日記(2)



家を建てる。

男は一生に一度、家を建てるものだ。爺さんからはこう聞かされた。しかし、爺さんの言う家とは、端から大工に注文をすることではない。それは、自ら材木を集めることから始まる。

山から木を伐り出してきて、これを何年か縁の下に寝かせておく。適当に乾いたところで木の皮を剥くのは子供たちの役目。剥いた皮は屋根を葺く材料にもなるし、これで塀を飾れば風流なもの。

次はつるつるになった丸太を削って柱を作る。この辺りから大工が登場して、太い柱をたてる時には大勢の村人が集まった。

もちろんこんな話は聞いただけで、見たわけではない。実際、大正時代にこの爺さんが建てた家が今も残っていて、その後、建て替えは行われていないから。

本当の話かと疑ってみるけれど、この家の大黒柱がシロアリの被害にあった時に、叔父は何処からか 2 トンのジャッキを借りてきて家を持ち上げ、自分で柱を直してしまった。あな

がち大風呂敷を広げた話でもないと思う。

私は自由が丘で傾いた家に住むこと 40 年。ついに、その建て替えを決めたけれど、もちろん東京の真ん中で、こんな建築はできない。多分、どんな田舎でもできないだろう。

現実には、あるだけのお金をかき集めて、足りない分は借金で補って、どこかの建設会社に発注をすることになる。新築ができあがった暁には、シャッキンバードとか言う鳥が、我が家の玄関先に飛んでくるだろう。



杉の皮を剥くのは子供たちの役目。

それはともかく、誰に頼めばどんな家ができていくらかかるのか、見当もつかないのです。

車ならばメーカーのカタログを見て、性能を調べて、納得がいかなければ展示場に行って試乗でもすればいい。

しかし、建設会社にはどうも馴染みがない。テレビを見れば何とかハウチュウと言っているけれど、カタログを見たことはないし、見たところで実際にどんな家ができるのか、想像もつかない。

それでも、失敗をするわけにはいかない。新しい家がまた傾いたりしたら、私は水平という感覚を知らないまま、生涯を終えることになるのだから。

ピサの斜塔は、遠くから眺めるからいいのであって、どうあってもあの中に住みたくはな

いのです。

ちょうどその頃、横浜のマンションが傾いた事件が毎日のように報じられていた。原因は基礎工事の不備で、地面に打ち込む杭の長さが足りなかった。

どこのハウスメーカーに行っても、今どき、そんな不手際は起きないと言われるけれど、横浜のマンションだって、建ってからまだ10年にも満たないのではないかな。



眺めるだけでいい。ここには住みたくない。

こんな不安を抱えて、たまたま同窓会で会った建築会社の友人に相談をしてみると、わざわざ我が家まで足を運んでくれた。しかし、聞けば同じ建築でも、友人は大手ゼネコンの役員で、我が家はいかにも小さすぎた。

ピントはずれなことを続けて、話は空回りをするばかり。でも、私は決して無茶な要求をしているのではありません。ただ、傾かなくて、雨が漏らない家が欲しい。

そして、なるべく近所に迷惑をかけないように、今ある鉄筋の家を壊したい。

多分、こんなことに悩むと思って、散歩の度に新築をする家を見つけると、その工程をつぶさに観察していたのです。

大工さんが昔ながらの方法で、木の柱を組んでいく家もあった。鉄骨で柱を組んで、どこから持ってきた壁を貼り付ける工法も見た。

大きな土地はいくつにも分割をして、小ぶりの建売住宅を作る。こういう場合、数軒の家がほぼ時を同じくして建築を始めます。

大した基礎工事もせずに、柱や壁を組み立てるだけの家はすぐにできあがる。地面を何メートルか掘って、しっかりとした基礎を作るところは工期が長い。

それでも完成してしまえば、どれもきれいな仕上がりで、素人目には区別がつかない。

何年か前に感動をする工事があった。それ

はまさに我が家の目の前で展開された建設ショー。基礎工事には巨大なネジまわしのような機械が運び込まれて、長い杭がくるくると回転しながら地中に埋まっていく。

基礎と鉄筋ができ上がると、今度はタクシーの配車のように、次々とミキサー車が現れて、コンクリートを流し込んで去って行った。

切れ目のない作業は、工場のベルトコンベアでも見学をしているような気分。Mという社名を覚えておいた。

時間を見つけて本を読んでネットを見て、にわか仕立ての知識を携えて、再びハウスメーカーの展示場を回って歩く。

大した根拠はなかったけれど、この中からM社の他にもS社、H社が候補にあがった。

各社の人には、ある程度の設計を提案してもらって、そのプレゼンを聞くという作業に取り掛かる。

H社は重量鉄骨でとにかく丈夫。耐火性も優れていると言われたけれど、設計図を見ると居間の真ん中に、鉄骨の太い柱が2本立っていた。日照権やら姉歯事件後の法改正やらで、設計の自由度がずいぶん制限されたとのこと。

次にS社は面談の当日、ついに姿を現さなかった。聞けば約束をすっかり忘れていたとのこと。後日面談は叶ったけれど、先行きがどうも不安。

何より驚いたことは3社とも、申し合わせたように同じ見積り額の金額を出したこと。結局は建設ショーを見せてくれたM社が設計の自由度も高く、ここに決まりました。

この先どんな感動があるか。

この先どんなトラブルがあるか。

想像もつかないけれど人生、何回か確たる根拠がなくても、大きな決断をしなくてはならない時があるのです。



40年以上も使った思い出深い診察室です。